授業リポート

まどさんの詩に出会う

筑波大学附属小学校 青山由紀先生 ×四年生（三十九名）

まど・みちおさんの詩に出会った子どもたちは、どんなことを感じ、どんな発見をするのでしょう。

青山由紀先生による四年生の詩の授業の一時間をご紹介します。

撮影：鈴木俊介

1 これって、詩なの？

「今日は、詩の勉強をしようと思います。詩は詩なんだけれど……」。青山先生はそう切り出しながら、黒板に紙を貼り出した。

さんぱつは　きらい

「これだけ？」「詩の題名？」「続きはあるの？」とざわつく子どもたちを前に、先生は「題名じゃないよ。題名は別にあるの。これが全部」と答える。そうして、貼り出した紙の右側に四角い枠を書き、その下に「まど・みちお」と、作者の名前を書き入れた。

「これは、まど・みちおさんの一行詩。俳句より短いね。題名と合わせて楽しむ詩ですよ。『さんぱつ』という言葉から、こんな題名じゃないかって考えてみて」と、先生が投げかける。

思い思いの発言をする子どもたちに向かって、「じゃあ、ヒント。生き物の名前が題名です」。先生がそう告げると、一斉に子どもたちの手が挙がった。「ライオン」「ハリネズミ」「羊」。どれも「さんぱつ」が嫌いな感じがする。ここで先生が、四角い枠に題名を書き込む。

▲身振りを交えながら，自分が考えた生き物を発表する。

ケムシ　まど・みちお

さんぱつは　きらい

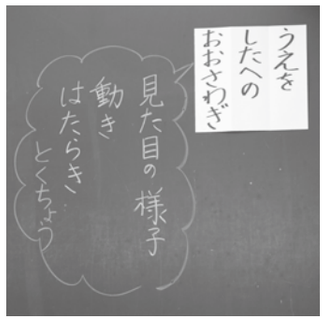
「へえ、そうか」「なるほどね」という子どもたちの声を受けて、「みんな、なるほどと思ったでしょう。題名と合わせて楽しむ詩だって言ったのは、そういう意味ですよ」と先生。そして、「これも、まど・みちおさんの詩です」と言いながら、違う紙を貼り出す。

うえを
したへの
おおさわぎ

この詩の題名は何だろう。「あり」「山登り」「おみこし」と次々に発言する子どもたちに先生が出したヒントは「野菜の名前」。そして、四角い枠に題名を書き入れた。

もやし　まど・みちお

うえを
したへの
おおさわぎ



「さっきの『ケムシ』も『もやし』も、詩の中に題名の言葉は入っていないけど、題名を聞いたとき、なるほどなって思うでしょう。どうしてかな」と言いながら、先生は黒板に書き出した（右写真参照）。

「ねっ。見た目の様子とか、動きとか、はたらきとか、本当に特徴をうまく捉えている。題名と合わせて楽しむ詩だと言った意味が分かったでしょう」。そう言うと、先生はさらに別の詩を紹介する。「分かった」「きっと、こんな題名だよ」と、前よりも元気よく全員の手が挙がった。

2 まどさんに挑戦しよう

「じゃあ、今度はみんなに詩を作ってもらいます。まどさんみたいに短い詩、題名を聞いたら、あっ、そうかと思う詩を四行以内で作ってみよう」と投げかけながら、先生は黒板に題名の例を並べた。

・シマウマ
・いびき
・けしゴム
・ミミズ
・ノミ

「グループごとに、この中から一つ題名を選んでね」。先生が言い終わるのを待ちきれないように、子どもたちは、グループでの話し合いを始めた。

◀五つの中のどの題名を選ぶか話し合う。

▲グループで考えた詩を画用紙に書く。

子どもたちが書いた詩

ミミズ
こわい　こわい
都会の地面は
足だらけ

いびき
おおきく
ちいさく
よなかの　がっき

シマウマ
昔のテレビが
走っている

ミミズ
ようふくは　ちきゅうです
オーバーは　うちゅうです
—どちらも
一まいきりですが

いびき
ねじを　まく
ねじを　まく
ゆめが　とぎれないように

シマウマ
手製の
おりに
はいっている

まどさんの詩

「何にする?」「やっぱりシマウマじゃない」という題名の相談もあれば、一度考えた詩を「もっと短く削ろうよ」と話し合っているグループもある。

十五分後、グループごとの発表へと授業は進んだ。画用紙に書いた短い詩を、最初は題名を隠して発表し、聞いたみんなが題名を当て合う。正解が出たら、題名を入れて、自分たちが作った詩をもう一度読む。

一つのグループの発表が終わると、先生は、「今の題名は『ミミズ』だったね。じゃあ、これを見て。まどさんが書いた『ミミズ』よ」と、まどさんの詩を貼り出す。次に別のグループが発表すると、やはり同じ題名のまどさんの詩を貼り出した。

▼自分たちが作った詩を，グループ全員で読む。

3 まどさんって、さすがだね

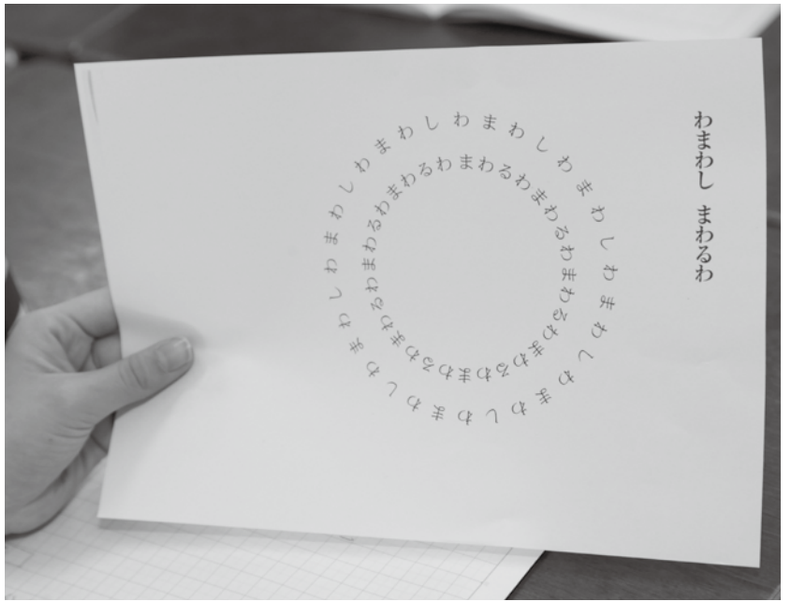
まどさんの詩が貼り出されるたびに、子どもたちから歓声がわく。「まどさんって、頭がよすぎる」「頭がいいんじゃなくて、頭が柔らかいんだよ」「想像力が豊かなんだ」。

自分たちも「見た目の様子」「動き」「はたらき」といった特徴を捉えて、短い詩を作った経験の後だけに、「まどさんって、さすがだね」という思いが自然と生まれてくる。

そんな子どもたちの様子を見ながら、授業の終わりに、先生は一枚の紙を黒板に貼り出し、みんなにコピーを配った。

紙にあるのは、遠くから見たら二重丸にしか見えない、円の形に並んだ文字だ（上写真参照）。

「これも、まどさんの詩です。こんな詩も書いていたんだね」。先生がそう伝えると、「ええっ、これも詩なの」「どこから読むのかな」と言いながら、みんなは真剣にそれに見入っている。今度はこんな詩に挑戦するぞと言いたげなまなざしだった。



■青山先生が授業で使った詩

「ケムシ」「もやし」
「はがき」「シマウマ」
「いびき」「けしゴム」
「ミミズ」「ノミ」
「わまわし　まわるわ」

授業を終えて
青山先生のお話

まどさんの詩を通して、対象の特徴を捉え、短い言葉でそれを表すおもしろさを知ることが、今回の授業のねらいでした。

題名と合わせて「なるほど」と思うことが大事なので、子どもたちには、「なぞなぞやクイズの詩じゃないよ」と伝えました。

読んだり聞いたりするだけでなく、自分たちで作って、それをまどさんの詩と比べてみることで、「まどさんって、すごいね」という実感につながった気がします。

あおやま・ゆき

東京都生まれ。全国国語授業研究会常任理事。使える授業ベーシック研究会常任理事。著書に『話すことが好きになる子どもを育てる』『古典が好きになる——まんがで見る青山由紀の授業アイデア10』などがある。光村図書小学校「国語」教科書編集委員。